

が見える。素より斯の如き事實が存したとは覺えないが論鶴羽山の由來がかなり古くから靈所として、如上の諸山と並び稱せられたことだけは疑ひないことゝ認められる。

さて斯く數へ來る中に就いて北は出羽の羽黒山、下野の日光山續いて紀伊の熊野三山、豊前の彦山、伊豫の石槌山然して淡路の論鶴羽山、これらは皆いづれも修驗道の山として有名なる存在である。

考は少しく岐道に入るが、斯く修驗の山々を想ひ來るにつれて、時代は降るが世阿彌の作と推せらるゝ謠曲、葛城には出羽の羽黒山に住む山伏が大峯山、葛城山に參詣せんとして雪中に於て葛城の神に會ふ説話は日本靈異記^{上廿八}から採つたか出てゐる。又同じく世阿彌作と傳へらるゝ謠曲、花月には豊前彦山の住人が子を失つて僧となり諸國を遊歴して行衛不明の子に邂逅して其の物語を聞く。子は天狗に捕らはれて山々を連れ歩かれたことを話す。其山々を諳つて曰く

まづ筑紫には彦の山、深き思ひを四王寺、讃岐には松山降りつむ雪の白峰、さて伯耆には大山、丹波の境なる鬼ヶ城と聞きしは天狗よりもあそろしや。さて京近き山々、愛宕の山の太郎坊、比良のの峰の次郎坊、名高き比叡の大嶽に少し心の澄みしこそ月の横川の流なれ。日頃はよそにのみ見てややみなんと眺めしに葛城や高間の山、山上大峰釋迦ヶ嶽、富士の高嶺に登りつゝ雲に起き臥す時もあり云々

と述べてゐる。これらの山々は靈山にあらずんば悉く修驗道の山山であつた。斯の如きは平安朝の中頃から鎌倉室町時代を通じて修行者が山々峯々を抖擻して超世間的の生活に其の法悦を

樂しんだのであつたことを示すものである。

修驗道は役小角や越前澄を代表者とせられてゐるが其根本は直接印度からの思想であらう。文武天皇の前後から發展したもので本來存する我國の民俗的宗教の要素が強い働きを持し、それに道教的な支那思想や當時存した佛道修行の風習等に相關連し、それが僧侶に依つて特殊な一流の宗教的形態に結成されたものであり、現在に於ては天台宗と眞言宗とに分屬してゐる。

山嶽や森林を崇拜することは我上代からの風習で殊に美しい山に接しては是を直ちに山咋神として崇め、幽絶な山林溪谷に接してはそこに何かの神靈精靈の宿る所と觀するのが古代日本人であつた。後代に至つて佛教が山林に修行の道場を求めんとする場合、そこには已に前の時代、丁度神明の祭壇があつたことが多かつた。前記の山々の多くは其の場合に該當してゐるのである。斯くして其地方を抖擻する此派の僧徒は山中にて心身を練り、法を修する間に神明に對する一種の感通を得、神社と此派の佛徒は遂に離るべからざる關係にあつたことが神佛習合説の基をなすに至つたのであらうと認められる。小角、泰澄、勝道等の傳記がいつも神秘の間に搖曳してゐるのは勿論、後人の間の附會もあるが元來が兩教媒合者としての不鮮明な態度にも一考を要する次第である。此の系統の分布してゐた地方は大和國、葛城山を中心とし、吉野、金峰の山系から紀伊國熊野にかけての連山、或は下野の二荒山、加賀の白山などが最も著聞してゐる。而して本稿に於て説かんとする淡路の論鶴羽山は矢張この系統に屬してゐるに係はらず、從來史料も失はれ或は遺蹟も亡んでゐる關係上、あまり世上の注意に上つてゐないが故に茲にこれを紹介せんとするのであ



殿 社 社 神 羽 鶴 諭 圖 八 十 第

る。九州の彦山四國の石槌山に分布する間に淡路の一角にも古代に於て此の思想が行はれしを考へることが一つの史的意義を齎らすものであると信ずる點に於て一顧を促がしたのである。

二

諭鶴羽神社は三原郡灘村吉野小字黒岩字篠山に鎮座する郷社である。海拔約二千尺の山頂に近い地に境内約三千三百坪を擁して郷民の崇敬を集めてゐる。御祭神は伊弉册尊速玉之男命事解之男命の三柱である。社記も調べられてゐるが無遠慮に申せば根本史料が乏しいため幾分正確の度が薄められてゐる。就中創建に關しては前節に述べた熊野や彦山の傳説を引いて崇神天皇の御宇と記してある。また元祿三年に作られた淡路隨筆によると熊野社と同體分身であることを述べ

臨于淡路國南海之最高峯謂諭鶴羽山有神乃熊野同體分身也口碑云伊弉諾伊弉册之二神駕鶴翼踰

海飛于南紀此山與熊野山往來遊戲在此山則謂諭鶴羽權現在熊野則謂熊野權現每歲臘月晦日之夜自熊野海中龍火飛來而至旦照諭鶴羽宮其言不誣云々

と記してゐる如く専ら熊野の御分靈と傳へられたようである。村人の口碑に傳へて

當社は紀州の熊野神社の御妹神なりしに其姉之を訪ねんとて其期を問ふ時に妹僞つて當社祭日の日を以て最も閑日なりと告ぐ即ち姉其日に至る。爾來當社の祭日に海上必ず荒るゝは姉神たる熊野神の來ます故なりとかや(會根研三氏開書)

とあるので推せられる。

抑紀伊の熊野神は太古の時代に當つて出雲と紀伊との交通によつて顯現し給ふた神で出雲國意宇郡の國幣大社熊野神社を本祠となし、熊野坐神社は神祖櫛御氣野命を家都美御子神と祭祀し新宮市の速玉神社は速玉之男神を祭祀してある。いづれも熊野連の齋く神であらう。

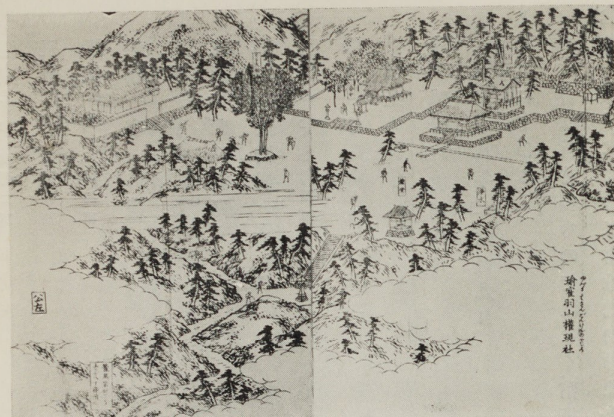
熊野連は饒速日命の子高倉下命から出た氏族であり成務天皇の御代その四世の孫大阿斗足尼が熊野國造に定められて以後其子孫の仕ふる所となつてゐた。さて此神社は漸次發展につれて多くの分祠を生じ且神佛習合の上には早くから著しい特徴を見せ延喜七年宇多法皇の行幸以來長久年間吉野金峰と連繫が生じて以來院政時代に入つて盛なる朝野の崇敬を得たことは周知の事實である。神佛習合の事實は平安朝から鎌倉に入つて益々盛になつた。其の本地佛の沙汰のあつたものは左の表によつて窺ふことが出来る。

熊 野 社

證誠殿	平安末	鎌倉初	南北朝	室町期
早玉宮中御前	阿彌陀	阿彌陀		
結宮西御前	藥師	藥師		
若宮	千手	千手		
十一面	十一面又は普賢			
地藏				
禪師宮	龍樹	龍樹		
聖宮	如意輪	如意輪		
兒宮	普賢	普賢		
十萬宮	文殊	普賢文殊千手		
一萬宮	普賢	普賢		
勸請十五所	釋迦	釋迦		
飛鳥夜叉	不動	不動		
米持金剛	毘沙門	毘沙門		
新宮飛鳥	愛染明王	大威德		
瀧尻王子	不動	不動		
飛龍權現	千手	千手		
子守	聖觀音	聖觀音又は地藏		

右の表は清原貞雄氏神道史に據る

茲に三原郡賀集村護國寺所藏文書に左の一通がある。前掲の表と併せ見て思半ばにすぐるものがある。



淡路名所圖會に描かれた護國寺神社 第九十圖

淡路國熊野現 □ □ 論

鶴羽山註文事

證誠大菩薩 一社二間一面 本地阿彌陀 □ 身

兩所權現一社 三間一面 渡在之 本地藥師 千手女體 俗體

若宮王子一社 二間一面 本地十一面 女體

五妹王子一社 五間二面 地藏法身

聖觀音 龍樹菩薩 法身如意輪 童子形 女體 □ □

普賢女體 文殊

不動 童子体 毘沙門 夜叉形

□ □ 明神一社 四間二面 龍樹菩薩 法身

地藏法体 如意輪 童子形 聖觀音 女體

滿山護法一社 虚空藏 飛瀧權現 千手俗體

□ □ 山神一社 大日

護法神一社 彌勒

常行堂一字 三間四面

經藏一宇 三間二面

長床一宇 七間四面

勸殿一宇 五間四面

鐘樓一宇 二盖

大門一宇 二盖

三面廻廊又渡廊アリ

不斷如法道場一宇 三間四面

□堂一宇 七間四面

湯室一宇 三間四面

已上十九宇

康正貳稔_丙夷則八日

天文十八年_{己酉}六月九日

と記されてゐる。

本文書は當時のものではなく、稍後年の寫であるが徳川初期よりは下ることはあるまい。この建物の様子によつて當諭鶴羽神社か熊野神と全く揆を一にした神社であつたことは明瞭に斷定することが出来るのである。

同じ護國寺には更に左の勸進帳を有してゐる。

夫以。和光同塵結縁之始。八相成道利物之終。然則本覺顯照月高晴而宿影於沙界玄刹。實相常住□□扇而及響於法界萬大。寔□衆生濟度基漸。出離生死濫觴也。爰淡州諭鶴羽山者。尋其權輿。元曰此山多々之橫峯。然當人王九代御宇。從五竺之境摩迦陀國尊神乘鶴羽來此峯。ト和光靈窟已降。名號諭鶴羽山大權現。抑此山者峯谷巖岑而列仙之陬諸聖之津也。然間前湛巨海顯法水之深。所謂東海悠悠而浪渤自然于發心。南海玄々而風磯任運于修行。後亦帶高山峙西北爲嶮々。是菩提涅槃類德顯苑然。誠閻浮無雙靈岳。扶桑第一妙窟也。因茲和光之靈驗新而衆民之仰有便。此故社壇并薨于薨而顯神德之巍々。朱樓續軒于軒而示利生之曆々。加臣和光明德輝一天爲萬民守護。權現惠風響四海爲此國加護也。爰以天智春朝者播日域無雙之嘉名。天慶夏空者振夷敵降伏之靈威。皆是濟度利生之方便。國家安全之誓約也。誰不崇之耶。雖然□屬末法猿犬譁鬪。人宗邪干戈起都。已來人民行不信不仰不得益。呼々神慮陵替衆炎起。神社破滅亡國基也。何不顧之耶。肆弟子等且雖企修理營。未逮輪花構。爭不唱十方知識者。豈能遂一段之素意乎。抑諸魯顏子之儔者。莫耻一簞一瓢之飲食。絹露集而湛海故也。陶朱士之景者。無慳千顆萬顆之珠玉。猛龍動而成霖故也。若爾者同心合力之男女。與善結縁之貴賤。現世一期間誇蓬萊萬歲之植運。最後十念時。到蓮臺九品之託生。仍勸進之狀粗如斯。

大永六年七月 日

勸進沙門宿尊敬白

大永六年は康正二年をさること七十年の後である。即ち此間戰亂の余波によつて炎上を受けたのであらうと察せられる。大永年度に企てた造營は恐らく天文の末に至つて大概營まれ得た

かと思ふが、これを證する史料のないのは遺憾である。たゞ天文廿年頃の紀年銘を有する石碑に（後節参照）よつて漸くそれを推定しうるにすぎない。

三

此社の本殿は山の頂に近い一角に南東面して立たせらるゝ。流造柿葺の二坪餘の建物で幣殿並に拜殿がこれに連續してゐる。今郷社として灘村一村を初め賀集村神代村等の崇敬を集めてゐるが其輪奐の美は恐らく往古の俤を偲ぶべくもないであらう。

本殿の西、社務所の南西に職員の宿坊あり、其西裏の叢林中に隆然たる小丘があり、恰かも一見古墳と考へらるゝ形態である。傳説を參酌するに恐らく經塚であらう。吉野金峯山から發見された國寶寛弘四年道長奉納經筒を出した經塚、大正年間發掘された熊野那智神社の經塚更に羽前羽黒山の系統の經塚、豊前各地より出る彦山系統の經塚に思ひを走せる時、何人も同系のそれに非ず

やと察せらるゝのである。いつか時機を得てこれを闡明するの好機あらんことを望まざるを得ない。

さて此の丘上に遺牌數十個が集められてゐる。舊社地の隨所から發見されたものを一所に集めたとのことである。今其の内の目星しいものを紹介する。



願主美作任人兩三人爲六親
熱田大明神御船也
天文廿一年五月廿八日

札觀音菩薩勸請
熱田善光如來御供兩三人奉脩
善光寺如來守
横並權助宮主漢子代女
不効至若薩勸請
カリヤ物中旦那爲也

六十六社神佛口
代文藏神勸請
天文廿一年五月廿八日

六十六社願主美作任人
未申万天神勸請
天文廿一年五月廿八日

六十六社神主祭祭昌
辰巳宇伽神牛護
天文廿一年五月廿八日

六十六社神仏所願成就
□□釋迦毘沙門
天文廿一年五月廿八日

大掌八大金剛童子午才
天六地神人大目國
同緣行者天文廿一年五月廿八日

三郎子所願成就
阿弥陀如來
六十六社神仏天文廿一年五月廿八日

願主兩年年辰年兩三人
村主熱田大明神勸請
村主立田大明神勸請

天文廿一年九月廿日
村主二王堂建立願吉日
倉堂七間四面可有

水生氏子
大旦那小旦那
官理大即太夫
東門諸行無常市
由良市即左衛門
現世安穩後世善處

水生氏子大旦那小旦那
南門是生滅法
爲現世安穩後世善處

金生氏子小旦那
西門生滅々已
爲現世安穩後世善處

水生氏子大旦那小旦那
北門寂滅爲樂
爲現世安穩後世善處

四

此節に於ては諭鶴羽山に關する斷片的の資料を散記しておく。

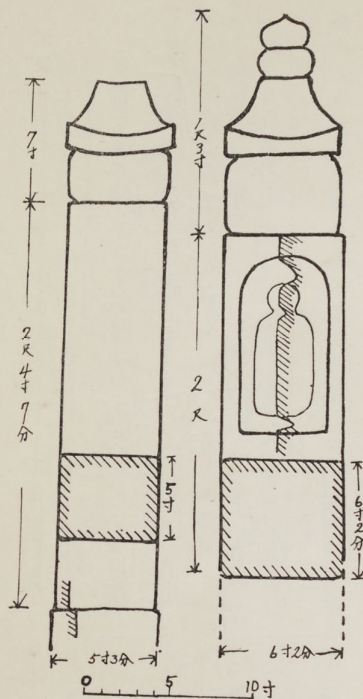
(1) 大正十二年四月當神社參道修理の際に一大發見があつた。それは左の如き町石である。

(梵字) (梵字) 一町 建武元年歲次十月甲戌十八日 願主阿闍梨行範

と記されてゐた。

高さ地上三尺一寸七分、巾五寸三分を有する。現存するもの僅かに一基にすぎないから此の町石が如何なる配置に置かれたか等のことを知るを得ない。たゞ年代を明かにし得たことを無上の悦とするに止める。次にそれ

第廿圖 諭鶴羽神社町石實測圖 (左圖は建武銘のもの、右圖は十六丁目附近にあるもの)



とは制を異にした町石が一本現在神代村から登る道筋の十六丁目附近にある。地上總高三尺三寸、巾六寸二分角、龜様のもの、中に佛體を浮刻せるものである。恐らく室町初期のものと想像される。

此の二基の町石によつて南北朝頃島内修驗道場の中心地とし

て繁榮を極め遙かに南紀熊野に對したる當時において朝暮群參絶え間なかりし參道のことが偲ばれて回顧の念禁じかたいものがある。

(2) 謠曲「淡路」に「さては當社二の宮にてましまさは、國の一宮はいづくにましますぞや。もし讓葉の權現にて御座候やらん」といふ文句がある。元より一ノ宮と稱へらるゝのは伊弉諾神社であらうがそれをしも讓葉山かと問はしめる裏面に此頃の讓葉山の強大さが鮮に印象づけられるのである。

(3) 山上に至る參道は淡路國名所圖繪や現在の口碑によると南山麓黒岩より登るを本道とするところがあるが南海岸は交通の便悪しく、恐らく町石の存在などによつて考ふれば北よりするのが昔の本道ではなかつたかと考へられる。

(4) 附近浦壁村に若一權現祠があるのは熊野關係による名であり、南麓灘村吉野の地名は役行者を祀り、大峰を模せし故と傳へられてゐるのは共に諭鶴羽山としては絶ち難き交渉であらねばならぬ。近世に於ては此山は修驗道當山派に屬してゐたらしい。

黒岩の地に神仙寺並に地藏寺がある。いづれも元兩部時代の關係寺院なるも今徴古の史料に乏しい。

賀集山古記に弓弦葉供養のことあり、其他讓葉の頭などのことも傳へられてゐる。起原沿革等不詳であるがまた徴古の一助である。

(5) 領主蜂須賀家は阿波の徳島に居城するが當社は其方角から東北に當り鬼門鎮護の爲相當の

崇敬を捧げられてゐたらしい。明確なる記録はないが承應には社殿の造營をせられたらしい。

蜂須賀忠英其の子光隆その子綱通三代に亘り(元和—延寶)この崇敬事實が野乘に散記されてゐる。

(6) 枕草子(峯は)の中にゆづりは(の)峯がある。從來の諸註は悉くこれを攝津の六甲山の一角に擬してゐるが果して當つてゐるだらうかは再考を要する。また謠曲(船辨慶)の中には(あ)の武庫山(風護葉が嶽より吹きおろす風)にこの船の陸地につくべきやうもなしとあるのは北は武庫山(南は讓葉山から吹く風で船は南にも北にも行かないで海中に立往生云々の意と解せらるゝ。これは明かに淡路の峯をさしたものだ。

また武庫郡御影町郡家に村社弓弦羽神社がある。これは現在の御祭神全く一致してゐる。恐らく淡路よりの勸請であるまいかと臆説を提出しておく。

五

以上記する所によつて當社は其初めは原始信仰に基づく觀念の發展によつて起り、中世の熊野信仰の大勢これに合流して大に繁盛を加へ、其結果若干の遺跡を傳へて今日に及んだ。殊に當島の地理的地位は、能く人文的消長を綿密に物語る遺跡としての價值を如實に保存してゐる點に於て意義深き國史の一面を窺はしめることを多とするものである。(吉井委員)

天然紀念物

調査委員 山鳥吉五郎
同 松本從之

有馬郡

第一 高平村市瀬の鶏冠木



第廿一圖 高平村市瀬の鶏冠木
(陸測量部五萬分一地圖)

所在 有馬郡高平村市瀬十二番地、松田良太郎氏別邸庭園内

現狀 福知山線三田驛より北東六軒にして縣道三田福住線に沿ひ其南側松田氏別邸の庭園の一隅にある、根本の周圍二・六三米、地上一米の高さに於ける太さは二・八米である、此邊から南北の二大幹に分かれる、北向するものは基部一・七八米、南するものは一・二五米の太さである、北するものは約八十糎にて四枝に分岐し二枝は枯死に頻してゐる、南するものは約二・四米で二又し更に枝を分岐する、樹高約六米「かへで」としてはあまり大樹ではない。

由來 昔此地は多田莊に屬し多田光仲なるもの花山院を訪ね來り光仲を送つて有馬郡と川邊郡との界なる此地に來たり之を植ゑたと傳へられてゐる。(山鳥委員)

飾磨郡

第二 英賀神社の竹柏

所在 兵庫縣飾磨郡英賀保村英賀保字宮ノ内縣社英賀神社境内

現狀 山陽線英賀保驛の南方約七百米にして縣社英賀神社がある神社の本殿の東瑞垣の東南隅に接し一本の竹柏の雄本がある。

根本の周圍 三・八米

地上一・五米の周圍 三・一米

高さ 一四・五米

地上五・二米の處の周圍三五五米で忽ち略同大の南北の二大幹に分岐し其周圍約二米強である幹の下部は空洞をなしてゐるが樹勢よく年々盛に開花する。

由來 此木に關する古記録がないから明でないが社司家傳承並に口碑を記したるものによると左の如くである。



第廿二圖 英賀神社附近地圖 (陸地測量部五萬分一地圖)

いつの比にかありけむ英賀彦神英賀姫神二柱この柵の樹に影向ましゝより人々此の樹を神木とあがめ注連ひき廻し瑞垣しつらへて畏敬し奉ること限りなくその落葉をひろひて御守護となす獨り身は一葉を持ち夫婦者は形大いさ同じきを二葉づゝ守袋に納むるに災厄のがるゝと申し傳ふ。

又此の社の前の海邊は「たいが濱」と云ひて

たいが濱英賀津彦男の昔より今に絶せぬ蜆のいさり火

と詠へる如く古き頃より漁の業する者いと多かりしが海人等船出する時は必ず此の柵の葉を戴きて護符とせし由なり。

或年の夏とかや大雷雨ありける時この樹に落雷ありて社殿安穩なるを得たるにより幾千代かけて枯れず朽ちせず護るべしと神のお告のありければ年を経て愈立ち榮ゆなりとぞ今に幹の中空洞にて雷の爪の跡と申し傳ふ處あり又根の邊りに「雷の頭」といひ傳ふ異形の瘤あり。

或る比この社夏の祭には巫女この樹の小枝もて齋湯をうちふり祓ふ神樂ありしにより夏祭を稱へて「柵祭」といひしこともありしよしなり。

竹柏は肥大成長の遅々たるもので三好博士の研究によれば周圍約一丈のものは約千年を経るといふ故に當社の竹柏は優に千年を経過してゐる當村助役上野作太郎氏の談によるに氏の幼時より此樹幹に存する空洞は同大で樹幹も殆んど太さを増してゐない。これによつても其肥大の遅々たることが知られる英賀神社記によると

當社ハ國史見在ノ社ニシテ三代實錄陽成天皇元慶五年五月五日壬子播磨國正六位上英賀彦神英賀姫神並授從五位下トアリ一千有餘年ノ往古ニ於テ既ニ朝廷ヨリ神位位田ヲ授ケラレ多大ノ尊崇ヲ享ケ給ヒシ古社ナリ云々

とあるによつても此竹柏は少くとも約一千年前に既に神木として此神社に植栽せられたものと推察することが出来る。是本縣下に於ける唯一の竹柏の大樹老幹であるから天然紀念物として保護するの必要がある。(山鳥委員)

第三 英賀保の根上り松

(圖版第廿三)

所在 兵庫縣飾磨郡英賀保村英賀神社馬場西入口

現狀 英賀神社の馬場の兩側には松並木がある其西入口の南側に燈籠に近く黒松の老幹がある幹根の堺周圍四・二米幹根の堺は西側は高く東側は低いから西側の幹根の堺から莖に直角に周圍を測定した目通幹根の堺より一・五米の高さ三・五米高さ二十四米で地上五・三米にして西方に第一枝を出してゐる約十本の根が地上に出て、蜻脚狀に伸びてゐる主として南方に伸びて長きものは八・七米に及ぶ根の太さは基部は〇・八―一米内外で地に入る所は三十五―六十糎である。由來 由來は全く明かでない。(山鳥委員)

第四 英賀保の英賀彦松・英賀姫松

所在 兵庫縣飾磨郡英賀保村英賀神社馬場西入口

現狀 英賀神社の馬場の西入口に根上り松と鼎立して英賀彦松と英賀姫松の二大幹がある。

英賀彦松 根上り松の東方二・四米で極樂松の南方六米を隔て、英賀彦松がある根幹の界は地上一・三米の邊にあつて其周圍四・七米である地に接する處の周圍は七米である幹



松彦賀英 圖三廿第

根の界より目通の高さに於ける周圍三米樹高三十四米である地上八・五米の高さに第一枝を南方に出し樹勢よろし樹皮荒さを以て里人之を地獄松といふ。

英賀姫松 英賀彦松の北方六米馬場を隔て、對立し英賀彦松より稍太いが主幹の上部は風の爲めに折れ且つ昨年の風害に一枝を根元より裂き落し樹相を損へてゐる根本の周圍四・五米地上一・五米の周圍約四米高さ十九米で地上六・五米にして西方に第



松姫賀英 圖四廿第

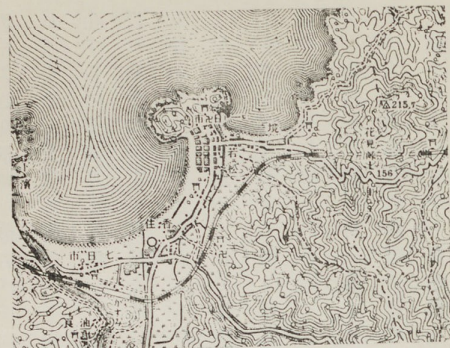
一枝を出す、樹皮が英賀彦松より滑かであるから里人此を極樂松といつてゐる。

由來 此三種共に其由來は明でないが此馬場を作つたときの植樹で其中の最大なるものが發育して今日に至つたものであらふ。(山鳥委員)

城崎郡

第五 香住の欒樹の自生地

(圖版第廿四)



第五廿五圖 香住町附近地圖
(陸地測量部五萬分一地圖)

所在 兵庫縣城崎郡香住町字一日市小字天王山麓

現狀 山陰線香住驛の東北約一・五軒香住谷川尻なる天王山の東側に欒樹の自生群落がある、山は石英粗面岩から成り東側は下部に之を露出する。山の上部には「しひ」、「けやき」等繁茂し其下方には岩壁の上に「ぬるで」、「はぜのき」、「ねむのき」、「あかめがしは」、「ひさかさ」、「たんどいはがさ」等の雜木と混じて欒樹を生じ其群落中最多數を占めてゐる、其區域は長さ約七十米、幅最も廣き處は二十米に達し面積約八百平方米に達し樹數約三百本である、古來里人之を薪として刈り取つたが爲めに大幹はない最大のものは四十五種乃至四十九種である、枝を多く出して多少傾臥するものが多い、七月花の満開時

には一面に黄色を呈し美觀である。

由來 由來は明でない、一體欒樹は支那の原産で河内の道明寺に老樹がある、推古帝の時代に此

寺を建立して大乘經を埋めた土の上に自生したと傳へられてゐる、多分此時代に隋から持ち歸つた種子を記念の爲めに播種したものであらふといはれてゐる、之が欒樹の我國に渡來した初めてあらふ、故理學博士齋田功太郎先生は其著大日本植物圖説に於て木曾山中多く自生すと記載せられてゐるが眞偽が疑はしく我國に自生するを聞かなかつた、然るに余は昭和七年秋此地に來て野生するのを發見して驚いた、もともとから野生したものか、植栽物が野に下つたものか不明である、此附近に植栽物がなく突然此地にのみ群落してゐる處に猶研究の餘地がある、其後北陸地方にも野生狀態のものがあることが知られた、何れにもせよ此地に野生狀態となつてゐることは珍らしきことにして天然紀念物として保護するの價值がある。

欒樹は木欒樹とも書く、學名 *Koelreuteria paniculata* Laxm. といふ、和名を「もくげんじ」又は「せんだんばのぼたいじゆ」といふ、むくろじ科の落葉喬木で高さ約三米餘に達する、莖は灰色を帯び褐色の皮目がある、甚だ裂け易い、葉は「せんだん」(棟)に似てゐるから此名がある、長さ三〇—四〇厘の複葉で小葉は六七對多きは八對で互生又は對生する、小葉は卵形乃至廣楕圓形で缺刻狀の重鋸齒縁で時には缺刻が深くなつて重複葉となることがある、表面は滑かで裏面には毛がある。

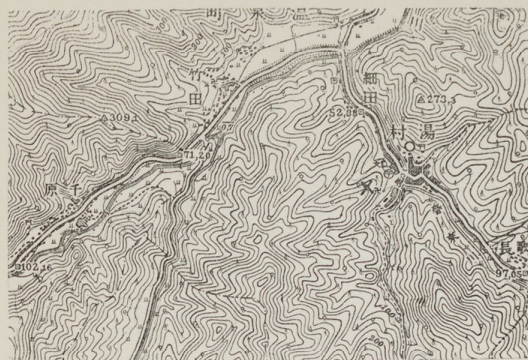
六七月の交枝梢に花を開く、長さ二十厘内外の圓錐花序で黄色の小花を多數につけて美しい、花は夢は大小不同の五片からなり淡綠色を呈する、花瓣は三又は四枚で一方に偏し單面平等花である、瓣は爪と舷とを有し爪は披針形乃至長楕圓形で基脚に二個の突起がある、突起は瓣の半開の頃には黄色であるが充分開花すれば朱紅色となる、爪は細くて毛茸を被る、雄蕊は八本で瓣と鈍角を

なして出る、花絲は長くて毛を被る、雌蕊は花柱は長くなく子房は長楕圓形で軟毛を被る、雌蕊先熟で花の半開の期には柱頭は葯の上部に出で、明瞭であるが充分開花すると花絲は長く伸びて雌蕊は現はれない、雌蕊の下に盤がある、秋季膨大した三稜形の蒴を結ぶ、卵狀長楕圓形で先端が尖る、果實の長さ三—五厘、果皮は膜狀で裂開して黑色の堅き種子を現はす、之をとつて珠數に用ゐる。

(山鳥委員)

美 方 郡 正 福 寺 櫻

〔圖版第廿五—第廿六〕



（圖地一分萬五部量測地陸）圖地近附町泉温 圖六廿第

所在 兵庫縣美方郡温泉町宇湯、正福寺境内
 現状 山陰線濱坂驛の北方約十軒に温泉村宇湯がある、其入口に正福寺がある、濱坂驛から寺の下までバスの便がある、正福寺本堂の前、寺庭の略中央に一老幹がある、根本の周囲一五八米で地面から一五米で東西二幹に分岐するが實は一・一米で二枝に分かれたものが並行して三五種の間癒着してゐるのである、一五米の高さに於ける周囲は一四五米である、幹の東側に地上一二米で枝を出しS字形に曲つて北方に向つてゐる西方の幹は地上一五米で枝を南方に出してゐる樹高は五・三五米で枝は半枝垂で主幹から東へ三八七米、西へ四四八米、南へ三六八米、北へ三米の範圍に廣がつてゐる葉に先つて花があるが花の満開を過ぐると忽ち葉を出すから其頃の眺は山櫻の感がある、嫩葉は紅色を帯び葉は倒卵形鋭尖で裏

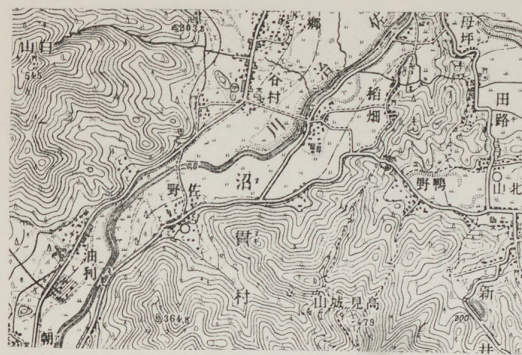
は淡く白色を帯び葉柄に毛を被むることは毛山櫻に似てゐるが葉裏の白色を帯びる點は山櫻に似てゐる花は繖房花序で下垂し花梗は細長く約二五—三〇厘で花梗花床共に毛を被る花床の筒部は倒圓錐形で此等の點は染井吉野に彷彿たるものがある、萼片の短かいは彼岸櫻に似てゐる、萼は普通の五片の間に稍小形のものがあつて十片となつてゐる、瓣は小形で微紅を帯び重瓣で約三〇—四〇枚ある、雄蕊は多數で約五〇—六〇本内外、雌蕊は一乃至四本で二本が普通で三本のものも可なり多い、四本のは極めて少ない、花柱は花外に出てゐる。

由來 由來は全く明かでない、京都嵯峨の植木屋佐野某なるものが櫻の種類を蒐集してゐたが昭和八年同氏は此寺に來て其變れる種であることを發見し自己の庭園に枝接をした其花を昭和九年春牧野博士に示したものが植物學者に知られた初めである、よつて博士は正福寺櫻なる和名を與へられた余は昭和九年此寺に行つて花を研究し同年夏此地にて果實及葉を調査して山櫻と彼岸櫻との中間のものたるを確めた、本年初夏牧野博士と同行した、同博士は山櫻と彼岸櫻との中間雜種ならんと斷定し學名を *Prunus Tajimensis Makino* と命名せられた、茲に於て初めて此櫻の名が定まつたのである、本春余が此寺に調査に來たとき來合はせた美方郡神坂尋常小學校長安住正良君は歸校して自校に此櫻の三株あることを報ぜられた故に此櫻は山陰地方にあるものと思はれるが、正福寺のものによつて初めて研究せられ命名せられたものであるから天然紀念物として保存するの必要がある。（山鳥委員）

水上郡

第七 大歳神社の棕

〔圖版第廿七〕



(圖地一分萬五部量測地陸) 圖地近附社神歳大 圖七廿第

所在 兵庫縣氷上郡沼貫村字油利村社大歳神社境内
 現狀 福知山線石生驛の西四五軒にして沼貫村油利の大歳神社がある、鳥居をくぐり礎にかゝらんとする處の左側に一大老棕がある、古墳の上に之を被ひて生じてゐる、古墳のために直根は深く地中に入ることを得ず、四方に伸びて露出し盤根は全く古墳を覆うてゐる、幹根の境は南側は地上一五米、北側は約一米の處にある、根と幹との境の周圍は約七五米根の周圍約十八米で南側には是より更に太き根が蛸脚狀に露出してゐる、幹は南方に約三十度傾斜し幹根の境より二四米で略同大の二大幹に分かれる、此より下部は幹内は一大空洞となつてゐる、分岐した二大幹中の一は略東方に向ひ暫にして枯死せる一枝を出してゐる、一は略西南に向ひ更に數枝に分岐する、樹高三十五米である、約十本の「いたびかづら」と二本

の「びべ」野菰の蔓が之にからまつて上昇する、「いたびかづら」の太きものは約三十糎、最太きものは四十糎のものがある、野菰の太きものは三十五糎に達し、棕樹の古きを物語つてゐる、樹幹の下部根と接する處に一つの穴があつて二十年程前までは狐が棲息して此孔から出入してゐた、故に里人は此處に稻荷神社を祭り小さき鳥居を建てゐる。

由來 此棕樹の由來は明でないが一千年以上を經過すと言はれてゐる、樹下の古墳は推古朝時代のものであるといふ、此上に落ちた種子が發芽して成長し今日の狀態に至つたものと思はれる、古文及口碑によれば昔應仁の亂後蒲生氏なる一武夫當地に通れ來て常に主家の再興を宿願してゐた、偶此棕樹の洞窟に老狐の住んでゐるものがあつた、人を恐れず悠揚たる態度靈威があつたから爾來之を崇敬し日々食餌を供し己が守護神として篤く祀り宿願達成を祈願したと傳へられてゐる、故に應仁の後即今から三百五十年前に既に大樹となり洞窟が出来てゐたと思はれる、其後裔こゝに稻荷神社を祀り棕樹を御神木として崇敬愛護して來た。(山鳥委員)

第八 大歳神社の櫓

〔圖版第廿七〕

所在 兵庫縣氷上郡沼貫村字油利村社大歳神社境内

現状 大歳神社の礎の上り口に老樟と相對し略其東方に十三米を隔てゝ生じてゐる、根圍は十二米半、幹根の堺の周圍九米、幹根の堺より一米半の高さに於ける幹の周圍六米、樹高三十八米である。幹は略眞直に發育し地上四五米の邊に萌芽の集合からなる瘤がある、地上七五米から南方に第一枝を出す、此枝はやがて二又して略水平に伸び、一は二十四米、一は二十八米の長さに伸びてゐる、高さ約十米の邊から稍北方に第二枝、南方に第三枝を出す、十三米の高さから南方に第四枝を出し、第一、第三、第四枝は略等距離を隔てゝ同方向に略平行に出てゐて、一特徴を現はしてゐる。樹勢極めて良好で、亭々として碧雲を凌ぎ、遠方から眺めると枝が四方に廣がつて天を覆ふの感がある、名木として保護するの價値がある。

由來 此木の由來も全く明かでないが、樟樹と相對して植ゑたものと推せられる、古來樟樹と共に油利郷の守り木として里人の崇敬し來つたもので、此兩木は直徑數十種の大注連繩で連ね大事の起る毎に此下で祈願をした、近くは日清日露の戰役に於ても皇軍の戰捷と出征軍人の安泰を祈願した。(山鳥委員)

津 名 郡

第九 洲本八幡神社の樟

所在 津名郡洲本町山下町字社地七百八十五番地、縣社八幡神社境内

八幡神社は洲本町南東の端に位し、洲本埠頭より南約五百米にある、應神天皇を祀る。

現状 樟は八幡神社隨身門の左側にあつて、主幹は東南に約四十五度の傾斜をしてゐる、東南の方向には石段があつて、根本を稍かくしてゐる、從つて其根本周圍を測量するに困難な事情がある、其根幹の堺目にて之を測るに、周圍七九米である、東南部以外の部は根部を露出し、其根圍り約十四米に達する、幹根の境より目通りの高さに於て、周圍六・二米である、主幹は高さ約五米の邊より東南に太き第一枝を出し、直に二枝に分岐する、第一枝の直上より四枝を出す、一は東南に一は西北に一は北東に一は略垂直に出で、此等は更に分岐する、此の如く、此樟は主幹は眞直に上方に伸長せず、略同じ太さの莖は四方に出で、恰も章魚の脚の如く、枝は四方に廣がつてゐる、從つて高さはあまり高くなく、約十六米である、之に反して、枝の廣がりは廣く、約二十八・九米の直徑の地面を覆つてゐる。

以上記述せる周圍及高さを表示すると

根本の周圍 十四米

根幹の境の周囲 七八米

目通りの周囲 六・二米

樹高 十六米

枝の廣がり 約六十平方米

樹幹の表面は蘚類一面に生じ、のきしのぶも亦多く着生して古色蒼然たるものがある。樟の側に句碑がある。

仰ぎみる千年の若葉神の庭 紫影

由來 明でない。

從來洲本は三熊山等にも樟の老幹大樹が多かつたが天井張として樟板を賞用したため悉く伐採して今は大樹の存するものが少い。藤井氏の語られる處によれば現今は八幡神社境内のものは淡路最大のものであるといふ。樟は暖地の産で南部には巨材が多い。鹿兒島縣始良郡蒲生村八幡神社境内には我國最大の樟があつて目通周囲約二十三尺である。八幡神社の此樟は全國的には敢て大樹といふことは出來ないが伊弉諾神社境内の樟と共に淡路最大の樟である。(山鳥委員)

第十 鮎原村河上神社の檜柏

所在 津名郡鮎原村字河上小字南谷縣社河上神社境内

神社は河上村の西方に位し洲本町の西方十二軒にある。

現狀 神社の正門を入り反り橋を渡り唐銅の鳥居を潜れば左側に本殿の前に檜柏がある。

根本周囲 三・六米

目通周囲 三・四米

主幹は北方に約四十五度の傾斜をするから根本の周囲は測り難い。故に北方の土に接する處に於て幹に直角の方向に測つて三・六米を得た。幹の南側の土に接する處より一・五米の處を目通りとして測定したのである。五米の高さより主幹の發育は停止し二大幹に分かれ一枝は斜に東方に出で忽ちして北方に傾斜して伸び多くの小枝を出す。一枝は西南に斜に出で忽ちして西北に曲り更に東北に急轉して小枝を分岐する。葉は鱗葉と針葉との二形を交へる。此木は樹相は面白いが北側は火事にあつて焼け主幹の北側は樹皮全くなく南側も樹皮殆んど剝脱して西側に僅かに之を存するのみであるから樹勢悪しく枯枝も亦多いのは惜しむべきことである。

由來 由來は明でないが御神木緣起として板に左の文章が記してある。

此の木は曾て菅公太宰府に御下向の途此地に御寄遊あつた際に自ら植ゑ給うたと傳へてゐる。享保二年拜殿修理を加へんと阿波太守より普請奉行を差遣はされし折此木屋根に生ひ掛

りたれば云々

當地にては之を御神木と稱し里人の崇敬深く信仰の中心となつてゐると宮司佐伯氏は話された。

(山鳥委員)

圖

版

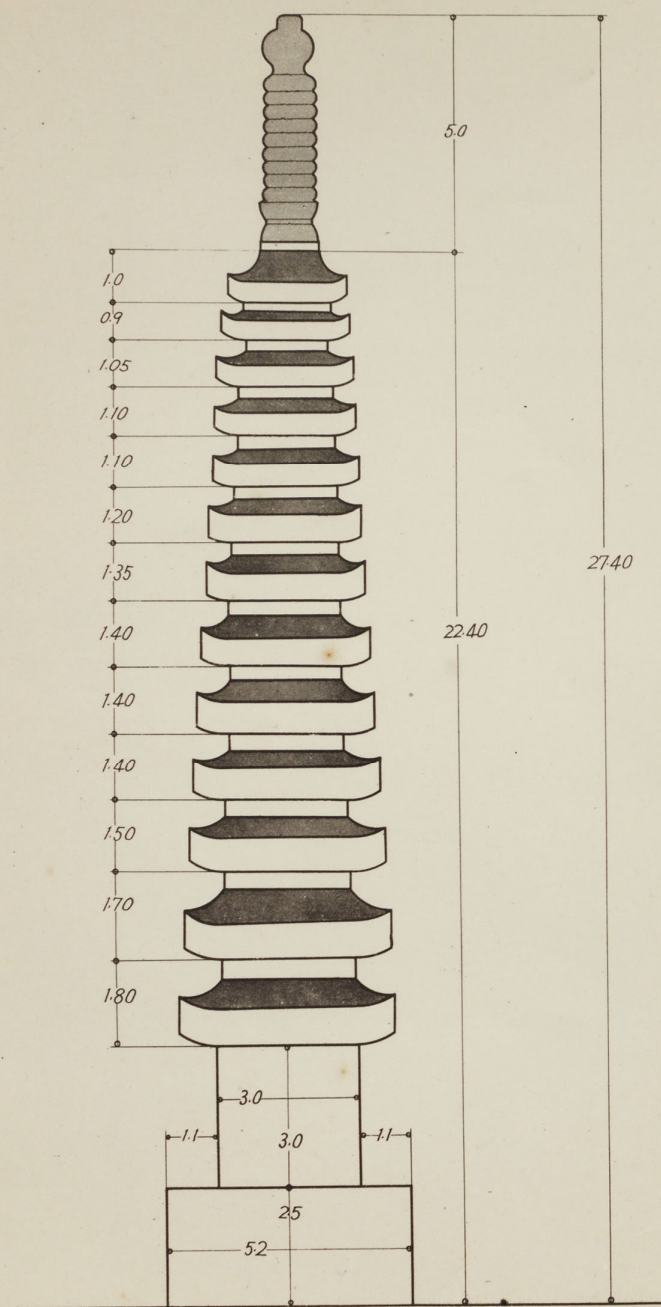


(上) 福嚴寺境内
(下) 同 境内出土古瓦

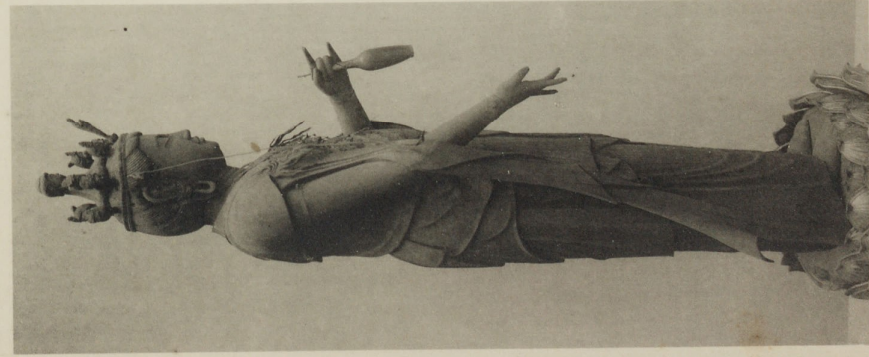


(上) 清盛塚全景
(下) 同 臺座銘文

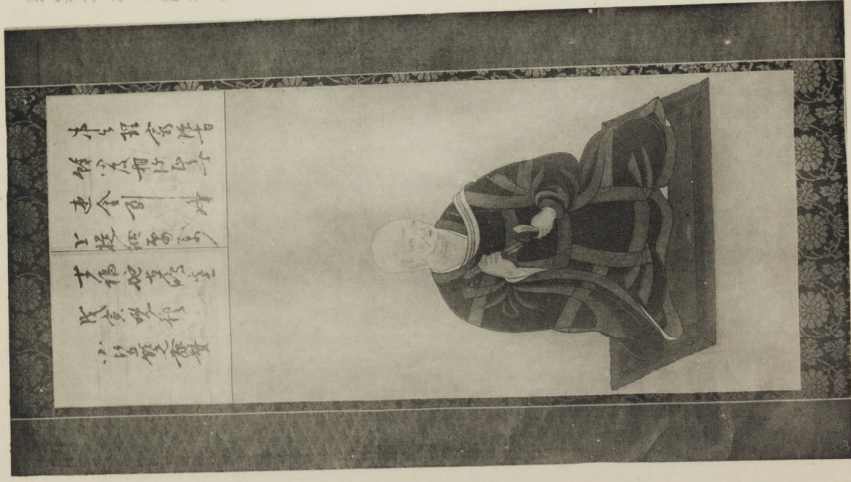




清盛塚實測圖



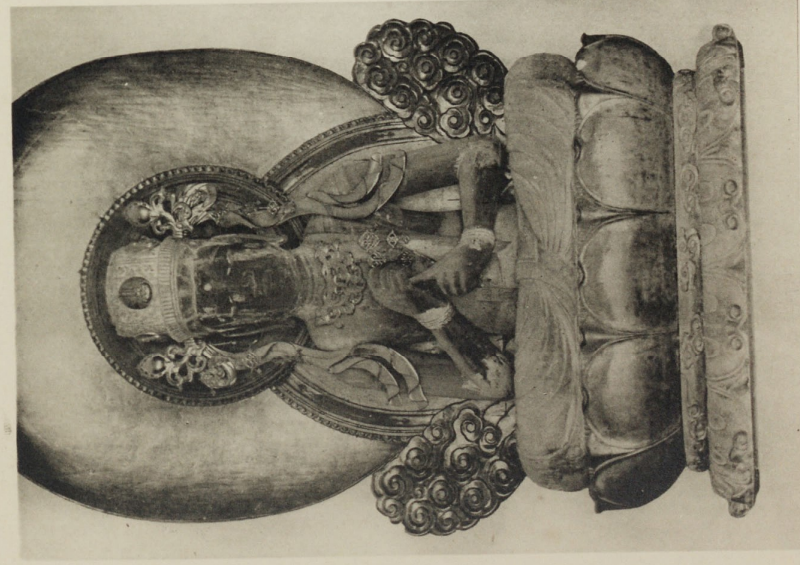
打出観音堂の十一面観音像



慈雲尊者自讚書像



額扁寺動無



大 日 如 來 像

(前 右)



釋 迦 如 來 像

(無動寺大日堂安置)



觀世音菩薩像

(無動寺大日堂安置)



不動明王像



道 趾 遠 望 (西より望む)



藥 師 堂



(應狀存遺石礎) 趾遺堂師藥



(む望りよ西) 趾 塔



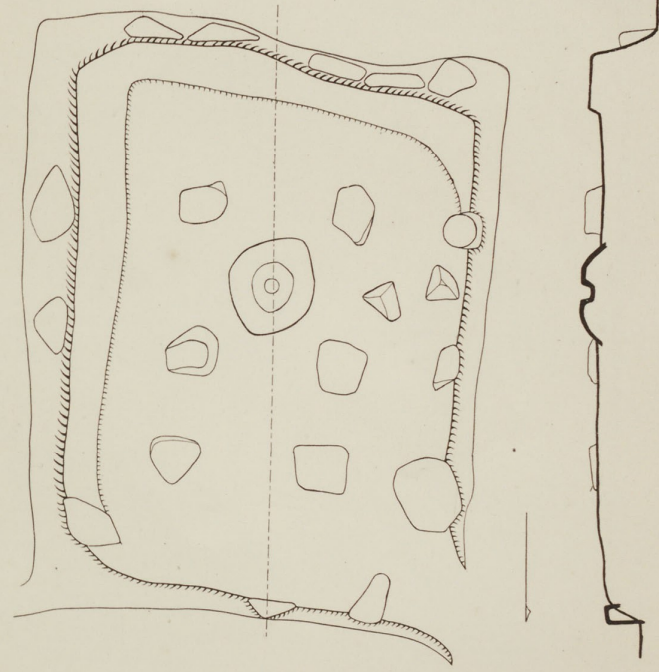
石礎るけ於に甍塔



(のもるあの座覆地及座柱圓
存遺礎南)

石礎一の存遺内境堂師藥

0 5 10尺



塔址實測圖 (式部測圖)

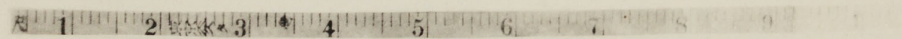


下太田廢寺跡出土遺瓦

(縮寫)

(側面)

(裏面)





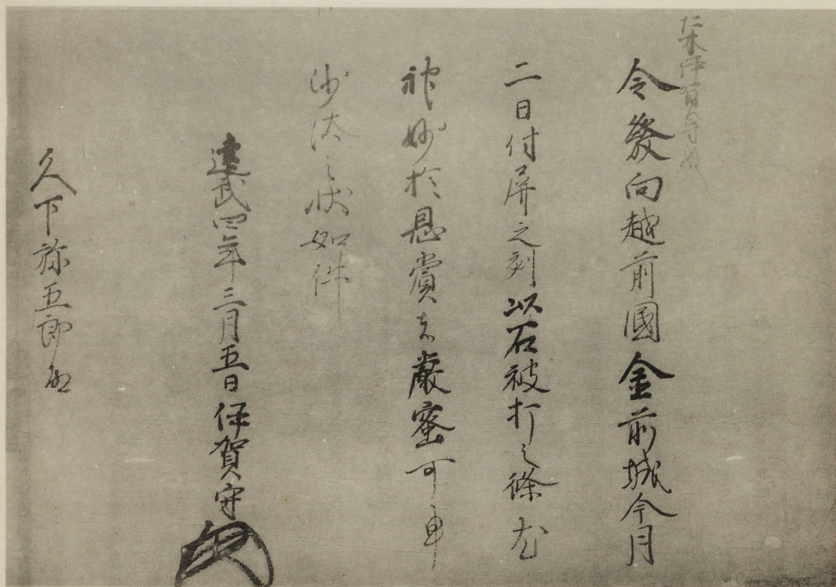
久下谷展望



(久下谷村) 常勝寺



(本岡村下久) 堂師薬



藏氏夫武下久

狀威章頼木仁

久下祿立郎重基中 今年^{連武}十月九日
 和久城御發向^之特御共仕於大寺攻口攝前
 倉晝夜致軍忠^之同日七日後攻御歌
 寄來^之間不惜身命及敵^之太刀打被
 斬^{右足}其子細致郎^{左足}度六郎今檢
 上者為後終可賜御^之御以^之旨可有
 御被^之給^之忠^之信^之云
 連武四年十月 日 松里基
 進上 御奉行所
 承由
 仁永四年

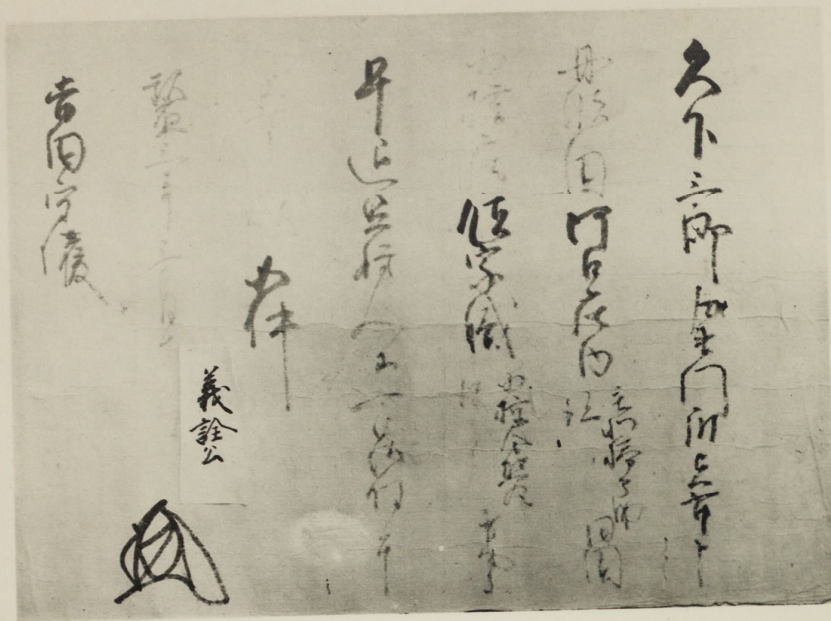
藏氏夫武下久

狀忠軍基重下久

下
 久下郎衛尉重基
 丁令早領知丹波國河口唐
 同國小掠唐領家方
 跡事
 右以人為勤功之賞所
 死行也古先例^之以
 狀
 見^之二年二月十日
 久下郎衛尉重基

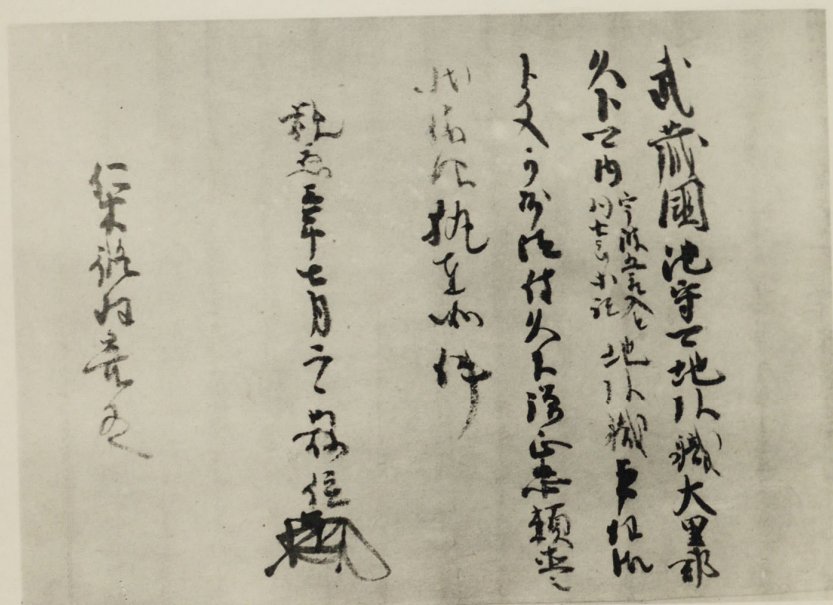
藏氏郎三五下久

女下詮義利足



藏氏夫武下久

書教詮義利足



藏氏夫武下久

狀行遵章賴木仁護守

清氏

天下無不是之父母

十月九日

丹美

去年七月六日昧後小泊室町より火を乞

下京炎上、内松之土瓦、大入之難、木

東海失之衆ありて海文禮物焚

上卷之八

清溪人爲向松之長子 立像誌

墨し和

卷一

中西新報

秀長

久下諷何守敏

今

四三二 七月五日午時生 午後蘇門答臘
馬河河水延壽寺 癸卯年辛丑七月五日

狀書長秀西中

[illegible]

帳進勅社羽鶴諭

(藏) 寺 國 (護)

社

前推六字一側四角

三十三字二側四角

社五立字二側四角

社

社

山神社大石

法神祉社物

行堂一字三側四角

經藏一字三側四角

長木一字七側四角

斷殿一字五側四角

建棲一字二蓋

門一字二蓋

三面廊又溪廟

創智通柳二字四角

室一字七側四角

名一字三側四角

九十

百可寺本所一日

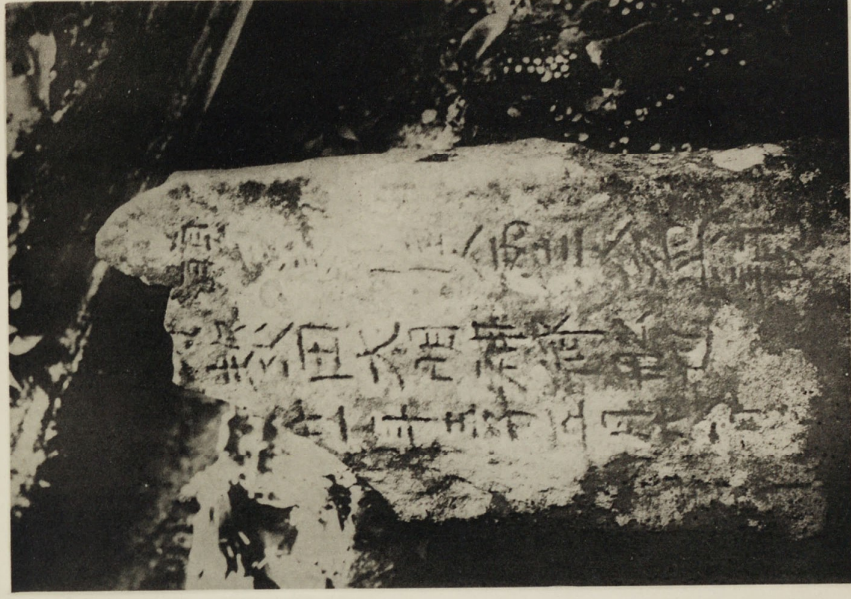
上院九

(藏) 寺 國 (護)

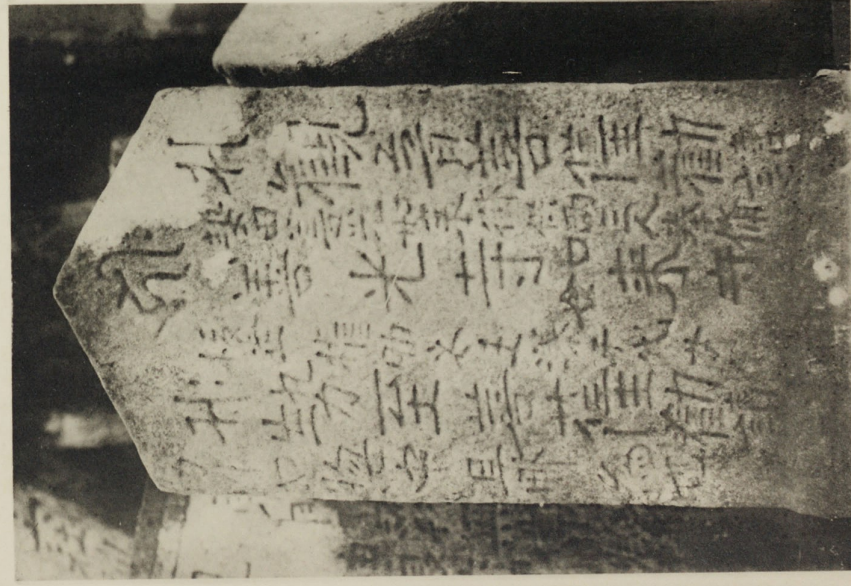
諭鶴羽神社境内遺存天文廿一年有銘遺牌

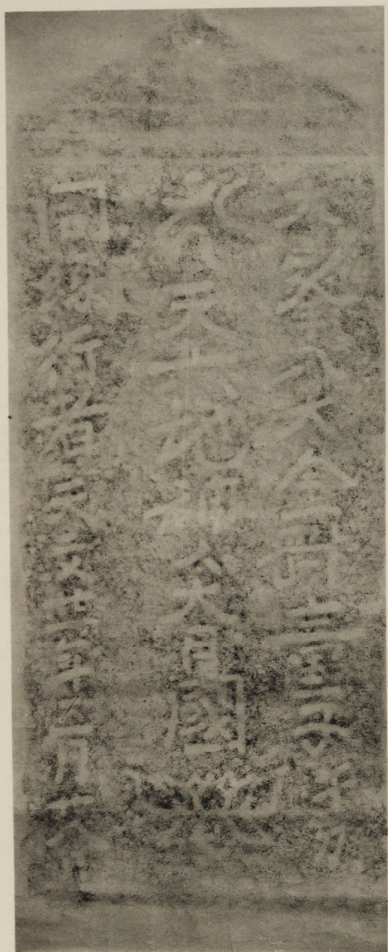


諭鶴羽神社境内遺存天文廿一年有銘遺牌

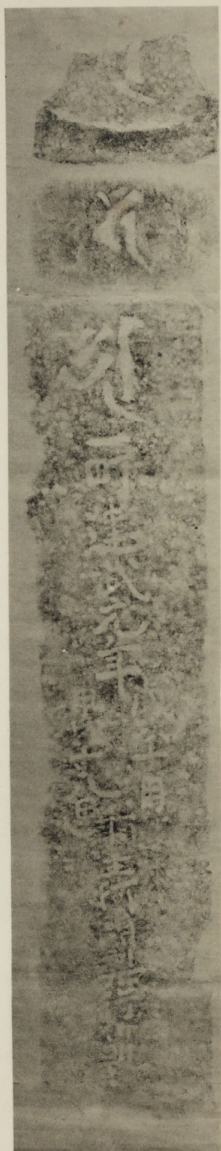


同 右





諭鶴羽神社境内遺存天文廿一年有銘遺牌拓影



諭鶴羽神社境内遺存建武二年有銘町石拓影



英賀神社の英賀彦松・英賀姫松



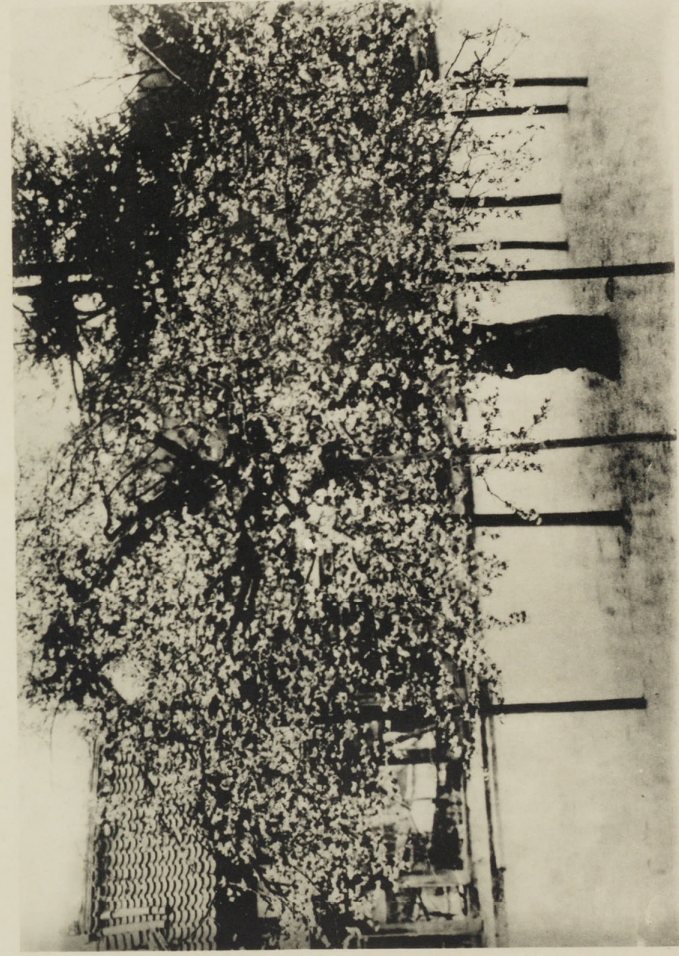
英賀神社の根上松



香住欒樹自生地



同上

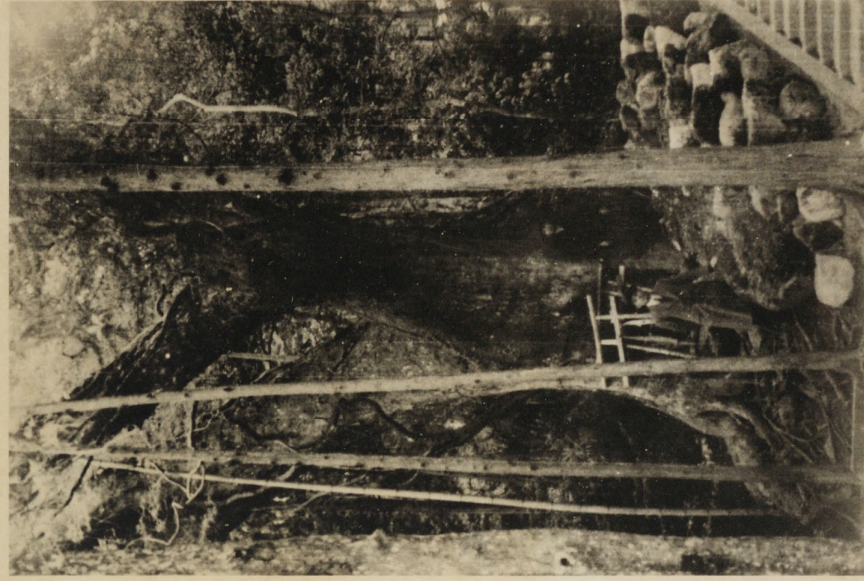


正 福 寺 櫻





大 歲 神 社 の 標



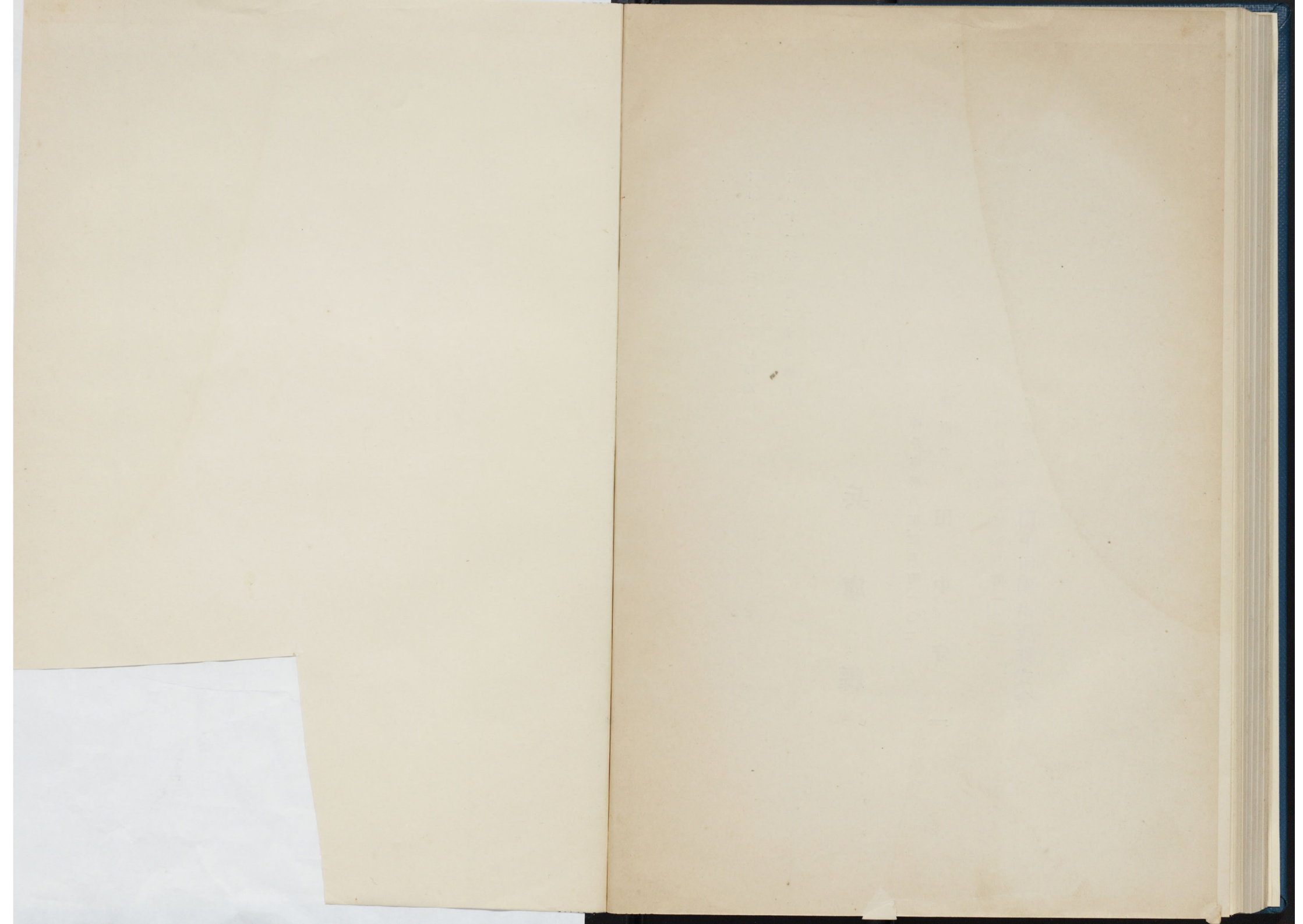
大 歲 神 社 の 椋

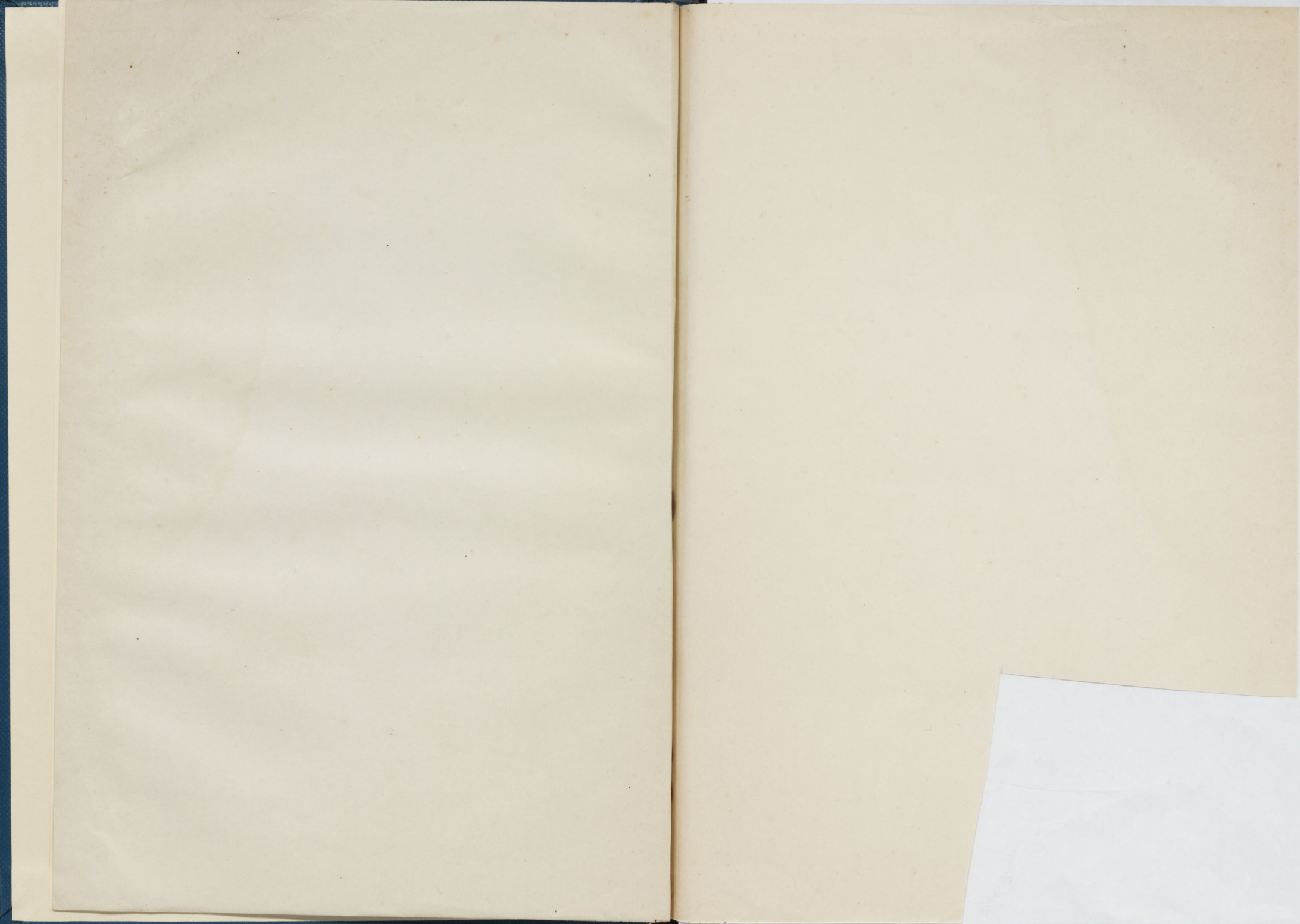
昭和十一年三月十五日印刷
昭和十一年三月二十日發行

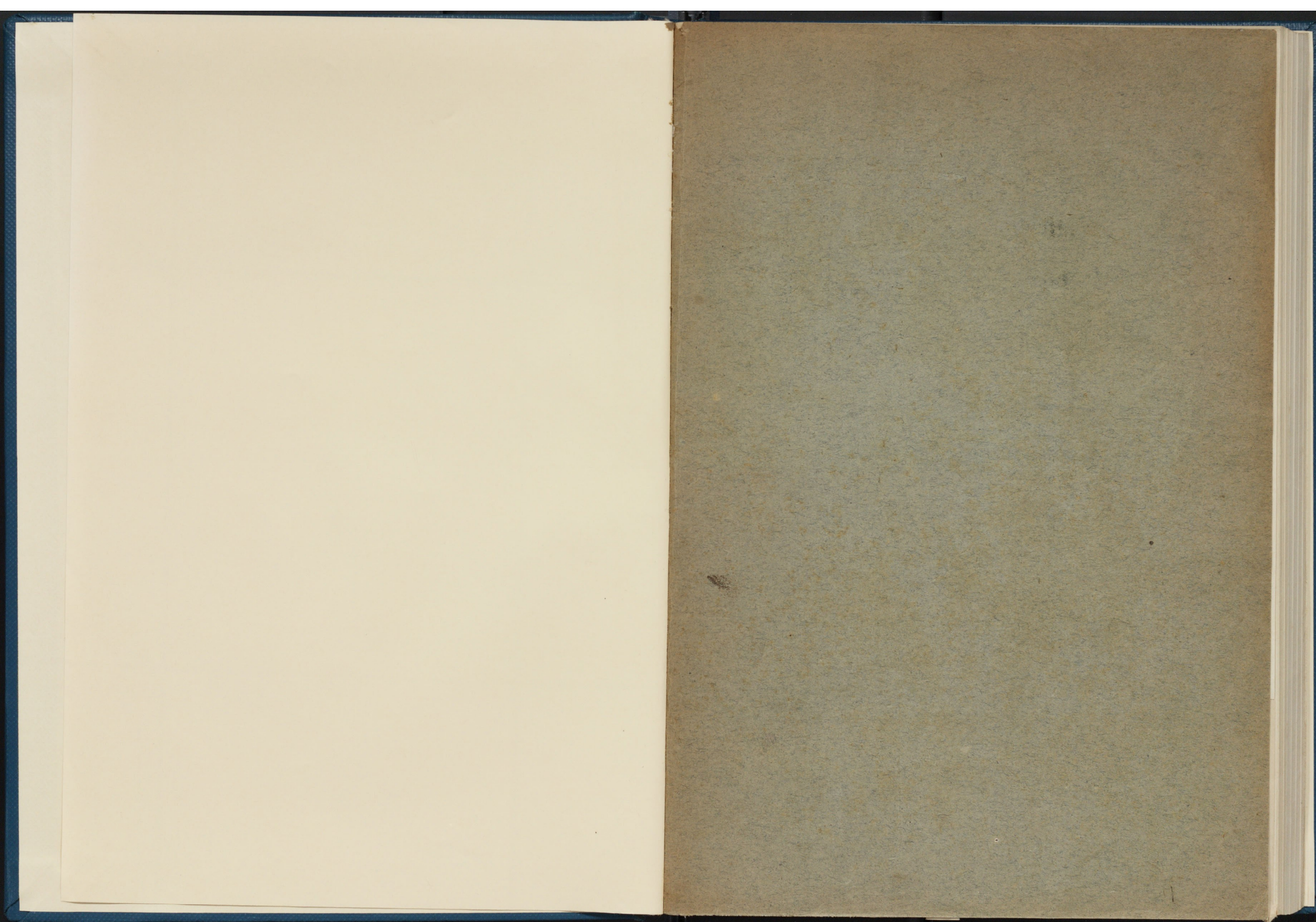
兵庫縣

印刷者 田中守一
神戸市神戸區江戸町一〇二

印刷所 田中印刷出版株式會社









兵庫県立図書館
☎ 078-918-3366



103375960